

## 地域づくり表彰

特定非営利活動法人日高わのわ会  
(高知県日高村)

地域のお母さんたちから生まれた

「村まるごと家族プラットフォーム」構築

特定非営利活動法人  
日高わのわ会  
事務局長

やすおか ちはる  
安岡 千春



### 1. 日高村の概要

日高村は、県都高知市より16kmの距離にありながら、身近に自然の豊かさを感じることができます。例えば、水質日本一に輝き、仁淀ブルーと称される「奇跡の清流仁淀川」では、屋形船の運航も始まりました。



仁淀川

特産品として、高糖度トマトのブランドである「シュガートマト」の生産が盛んに行われており、広大な茶園を有する霧山茶業組合では、お茶の栽培から加工までが行なわれています。



村内のとまと農家の方々

文化伝統としては、土佐二宮をいただいている小村神社に奉納されている国宝「金銅荘環頭大刀」や国の重要文化財である「木造菩薩面(2面)」、長宗我部元親の伝説がある「竜石神社」などがある歴史ある村です。



小村神社

### 2. 活動開始の背景・経緯

当会の活動を開始した15年前から、日中の村内には、何らかの事情で働けない人たち(子育て中の親子、高齢者、障がい者、引きこもり)が残っていました。そういった中で、子育て支援センターに集まるお母さんたちが、地域で何か役に立つことをはじめようと、「日高村住民活動グループわのわ」を結成しました。

子育て支援センター、高齢者のためのデイサービス、障がい者の居場所事業等の受託事業からはじまり、NPO法人になった後も「できる人が、できる時間に、できることを」を合言葉に、【年をとっても障害をもってもその人らしく暮らせる日高村】を目指して活動を展開しています。



創設前のミーティング

### 3. 活動の広がり

平成17年3月に、みんなで活動できる機会を継続していくため、法人化を決意しました。設立時は村からの受託である3事業から始まりましたが、現在では、物流支援事業や子どもの居場所づくり等の受託事業、グループホームの運営を含む障害者支援などの指定事業等10を超える公的事业に加え、喫茶2店舗の運営や村の特産品である

トマトの加工品の販売など独自に20以上の事業を展開しています。いずれも村民の困りごとを解決してきた結果であり、これから社会課題が増えていくなかで、役割がますます増えてきています。



物流支援事業の作業風景

### 4. 継続性

設立以前から、地域活動の継続には、やりがいでだけではモチベーションを保つことが難しいと考えており、利用者との対等な関係の構築のために利用者から対価をいただき、メンバーには労働相当の支払いをすることで、継続性と平等性を保てる組織運営が必要だと考えていました。しかし、当初は、会員に有償ボランティア相当の謝金しか支払うことができず、収入のメインが行政サービスの一環である受託事業であったことから、利用者から対価をもらいにくい状況であったため、独自事業を開始しました。独自事業においても、「村の困りごと」を解決する立場は変えず、独居老人への配食サービスから喫茶事業へ、保健師やキーパーソンへの連絡などの事業へと拡大しました。

### 5. 地域資源の活用

日高村の地域資源の一つであるブランドトマト「シュガートマト」の規格外品を活用したトマトソースの製造を開始しました。当初、トマトソースは一種類でしたが、お母さんからの希望があり、パスタと混ぜるだけで簡単に作れるパスタソースや小さいサイズのソースも開発し、商品のラインナップを増やしてきました。さらに、東日本大震災を契機に、被災地で野菜不足の状況があるなか、高知では野菜が廃棄されている現状を知り、トマトスープと乾燥野菜のセットを完成させました。

これらの取組は、村内で遊休施設になっていた元給食センターを村が共同加工場として改築し、活用することで今日に繋がっています。また、これまでの加工品の取組は、第百九十六回国会における安倍内閣総理大臣施政方針演説においても評価をいただき、更なる取組の推進へのモチベーションに繋がりました。



当会のとまと商品

また、当会の加工品は、村の地域活性化プロジェクトである「日高村オムライス街道」の各店舗の提供メニューにも使われており、地域を盛り上げる縁の下の力持ちとして活用されています。



オムライス

## 6. 創意工夫

「できる人が、できる時間に、できることを」を合言葉に、社会的弱者と言われる高齢者や子ども、子育て中のお母さん、障害者などが集まり、自分たちで地域の困りごとを解決していくことをビジネスとして実施しています。特に、上記の合言葉を10年以上も実践できている点が当会にしかない独自性です。

これまで様々な課題を解決してきたことを通して、住民や地域内外の方々との繋がり、連携、協力体制が確立されたことにより、継続性・拡大性をもって当会は成長しています。これにより、会員はもとより関係者の満足感を高め、地域の活性化を促す存在として、地域にとってなくてはならないサービスや居場所になっています。

地域外と連携した取組の一つに、住民や地域の大学生とともに開催している「日高メシふえすて

いばる」があります。今年で6回目となり、約2,000人の集客を誇るまでに拡大しました。



メシふえすていばるのチラシ

## 7. 成果

「地域づくり活動」をみんなが家族のように支え合い、助け合うようになることと捉え、10年以上取組を続けてきました。継続的に取組できたことで、設立当初は20人だった会員も現在では50人を超えています。会員数は単純に増加したわけではなく、中には一般就労に繋がったいわゆる「わのわ会卒業者」が30人もいます。例えば、2級ヘルパー養成講座を実施し、会員がヘルパー資格取得した結果、村からの軽度生活支援事業を受託できるようになり、さらに実務経験が積まれたことで村内介護施設に就職し、ケアマネジャーになった事例があります。これらは当会の活動を通して、関わる人が自ら成長し、生活の基盤を整えることができた実績です。



海遊館への研修旅行

## 8. 課題と展望

当会の中核メンバーが、子育て中のお母さんで構成されているため、運動会や参観日等で休みが重なり、人のやりくりが苦労するこ

とが多く、安定したサービスを提供できるように調整するのが大変でした。

今後の取組として、村が地方創生推進交付金を活用した事業に協力する地方創生再生推進法人に指定していただき、今まで活動してきた5部門に加えて、地域おこし協力隊と協力して日高村初の宿泊機能を備えた交流拠点施設「Eat & Stay とまと」の運営を令和元年11月9日から開始しました。都会から「いきつけられる田舎」を目指すとともに、日高村の産業の中心である「とまと」の情報を発信するフラグシップ店として、また、村内の様々な資源に結びつけるHUB的機能をもった施設として村内外問わず愛される場所になるように新たにチャレンジしていきます。

(URL : <https://tomatoto.jp>)



オープニング式典トマトカット  
(左から、日高村議会 森下議長、戸根村長、安岡事務局長)

最後に、「わのわ」とは、「人の輪」「話の話」「平和の和」が繋がり大きな輪となることを願って活動している団体です。このため、今後の展望は、村内だけでなく、わのわ会に関わる全ての人が成長し、活躍できる機会を提供できるよう、自分たちの培ってきたノウハウや思いを伝えていき、こうした取組やコミュニティビジネスが他の地域でも展開され、個人個人が生き生きと暮らしていける地域が日本全国に広がっていくようになることを願っています。



未来に向かってジャンプ